

【本文】

有情の邪見熾盛にて

叢林棘刺のごとくなり

念仏の信者を疑謗して

破壊瞋毒さかりなり

【意識】

人々の誤ったものの見方、煩惱は燃えさかる火のようにますます盛んになっております。

その様子は、まるで草むらや林が広く高く生い茂つて、そこに無数の茨(いばら)が沿い従い、あまたのとげを見せているかのようにです。

お念仏する人を非難中傷して

信心を壊し乱れさせようと怒りの心の盛んなこと、誠に憂うべき事です。

【私の味わい】

親鸞聖人は、お師匠の法然聖人共々に、時の朝廷によってご流罪とられました。朝廷とその結びつきが強い宗派から、身分・性の別なくお念仏によって等しくお浄土へ往かせて頂くという新興の教えが排斥された為です。不条理な決定によって、お師匠と今生の別れをせざるを得なかった親鸞様の言い様のない無念さが、このご和讃に感じられます。自分を正しいと前提にした上で、異なるものを怒って除こうとする当時の権力者(貴族、有力宗派の僧)の人々を燃え盛る炎、茨のとげと表現しておられます。しかし、そのような抑圧があつたにも関わらず、今お念仏のみ教えが私たちに広く流布されてあります。親鸞様は、如来様から賜った信心を「金剛石」、つまりダイヤモンドのように硬く、壊れることはないと思つて仰つています。強引に壊そうと思つても、傷一つ付けられない心が時を経て私たちに伝わってきて下さるからであります。

親鸞様は、次のような法然様のお言葉を大事にしておられました。「念仏する人々は、念仏をさまざましようとすると人を哀れむ心を持ち、気の毒に思つて心から念仏を称え、その人を助けなければなりません」と。

不条理なことは、不条理だと指摘する。しかし、そのことを感情的に根に持つていくのではなく、かえつてその人のことを心配しましょう、と仰います。そもそも自分の都合中心に物事の正邪を付けていくのは私も同じです。その私に気が付かせて頂いたお念仏に一緒に居あわせていただきましょう、そうお勧めすべきなのだ。(悠水)